

学位論文要旨

中国語を母語とする日本語学習者の敬語規範意識と敬語  
使用に関する分析

— 「人間関係」と「場面」に着目して —

広島大学大学院 人間社会科学研究科  
教育科学専攻 日本語教育学プログラム

D202613 鮑 小磊

# 目次

## 第1章 序論

- 1.1 本研究の背景と問題の所在
- 1.2 本研究の目的と意義
- 1.3 本論文の構成

## 第2章 先行研究

- 2.1 敬語の定義
- 2.2 敬語の対人機能
- 2.3 敬語形式の種類
- 2.4 敬語使用
  - 2.4.1 敬語使用の定義
  - 2.4.2 敬語使用を可能にする条件
  - 2.4.3 敬語使用に関する調査
- 2.5 敬語規範意識
  - 2.5.1 敬語規範意識の定義
  - 2.5.2 敬語規範意識の位置付け
  - 2.5.3 敬語規範意識と敬語使用の関連性
  - 2.5.4 敬語規範意識と知識の関連性
  - 2.5.5 敬語規範意識に関する調査
    - 2.5.5.1 「どのような人間関係と場面で敬語を使うべきか」について
    - 2.5.5.2 「どのような敬語形式を選択して使うべきか」について
- 2.6 学習者の母語における敬語と日本語の違い
  - 2.6.1 敬語の対人機能における違い
  - 2.6.2 使用される敬語形式における違い
  - 2.6.3 敬語が使われる人間関係と場面における違い
- 2.7 先行研究のまとめと残された課題

## 第3章 調査1：敬語が使われる人間関係と場面に関する敬語規範意識

- 3.1 調査目的
- 3.2 調査概要
  - 3.2.1 調査対象者
  - 3.2.2 材料
  - 3.2.3 手続き
  - 3.2.4 分析方法

### 3.3 結果と考察

#### 3.3.1 人間関係に関する敬語規範意識

#### 3.3.2 場面に関する敬語規範意識

#### 3.3.3 人間関係と場面に関する敬語規範意識の属性による差

### 3.4 まとめ

## 第4章 調査2：母語話者と学習者の場面(感謝・依頼・面接)ごとの敬語使用の比較

### 4.1 調査目的

### 4.2 調査計画

#### 4.2.1 調査対象者

#### 4.2.2 材料

#### 4.2.3 手続き

#### 4.2.4 分析

### 4.3 結果と考察

#### 4.3.1 課題1：敬語の使用頻度の分析結果

#### 4.3.2 課題2：敬語形式の種類分析結果

#### 4.3.3 課題3：発話丁寧度の分析結果

### 4.4 本章のまとめ

## 第5章 調査3：感謝・依頼場面における親疎関係の違いによる敬語の使い分け

### 5.1 調査目的

### 5.2 調査計画

#### 5.2.1 調査対象者

#### 5.2.2 材料

#### 5.2.3 手続き

#### 5.2.4 分析

### 5.3 結果

#### 5.3.1 課題1：敬語の使用頻度の分析結果

#### 5.3.2 課題2：敬語形式の種類分析結果

##### 5.3.2.1 母語話者の敬語使用傾向

##### 5.3.2.2 学習者の敬語使用傾向

#### 5.3.3 課題3：発話丁寧度の分析結果

##### 5.3.3.1 母語話者の発話丁寧度

##### 5.3.3.2 学習者の発話丁寧度

### 5.4 考察

#### 5.4.1 学習者の敬語形式の機能に対する理解不足

#### 5.4.2 学習者の非敬体に対する考え方

#### 5.4.3 学習者の敬語誤用

5.5 本章のまとめ

## 第6章 結論

6.1 本研究のまとめ

6.2 総合考察

6.3 教育上の示唆

6.4 今後の課題

参考文献

補助資料

補助資料1 調査協力承諾書

補助資料2 アンケート調査(調査1)

## 第1章 序論

敬語は良好な人間関係を築く上で重要な役割を果たすため、一貫して日本語の言語生活において重要な位置を占めてきた。宮岡（2005）は外国人学習者であっても、敬語を全く使わずに済ませることは、煩雑さを回避できるという利益以上の不利益を話し手に与えることになると指摘している。しかし、中国語を母語とする日本語学習者にとって、敬語は難しいものである（国際交流研究所 2002）。敬語の難しい点としてよく挙げられるのは、人間関係や場面に応じて敬語形式を使い分けるという点である（平 2006, 王 2010, 中川 2012）。日本語母語話者（以下、母語話者）は、敬語を使う際に、無意識のうちに人間関係や場面に応じた敬語形式に注意を払っている（荻野 1991）。一方、学習者は成長過程で自身の母語において体系的な敬語に触れることない場合があり、日本語学習過程での指導や経験を通し、敬語の使用方法を新たに身につけることになる（国語審議会 2000）。適切な敬語使用に関する知識が不足している場合、母語の知識が日本語に転移する可能性があるため、学習者の敬語使用は母語話者とは異なる可能性が指摘できる。また、大石（1983）では、敬語の使用実態を明らかにするためには、様々な場面や文脈での使用状況だけでなく、使用者の意識も含め、総合的に検討することが重要であると論じられている。そこで、本研究は、学習者と母語話者とで、人間関係と場面に関する敬語規範意識が異なるのか、また、人間関係と場面に応じた敬語使用が異なるのかを明らかにすることを目的とする。さらに、学習者と母語話者の違いが生じた原因について考察することにより、学習者に対するより効果的な指導の在り方について検討することができると考えられる。

## 第2章 先行研究

### 2.1 敬語の定義

敬語については、これまで様々な定義がなされてきた。先行研究では、敬語を広義に定義するか（石坂 1969, 大石 1975）、狭義に定義するか（辻村 1976, 菊地 1997）、言葉（辻村 1976）なのか、言語表現（石坂 1969, 菊地 1997）なのかといった点が論争の焦点となっている。本研究では、人間関係と場面に応じた敬語の使い分けに注目するとともに、学校教育しか受けていない母語話者と比較分析し、「広義」と「言語表現」の2つの観点から敬語を捉える。そこで、本研究では、文化審議会（2007）と『日本語文法大辞典』（山口・秋本 2001）の規定をもとに、敬語とは「話し手（書き手）が、人間関係や場面、文脈に応じて、聞き手や話題にのぼる第三者に対して表そうとする気持ちの在り方（敬意・へりくだり・丁寧さ・相互尊重など）に即して、主体的に選ばれた言語表現」と定義する。

## 2.2 敬語の対人機能

敬語には様々な機能がある。特に、話し手が相手に敬意などの気持ちを表すという意味的機能あるいは対人機能は、円滑な対人コミュニケーションで重要な役割を果たしている（浅松 2003）。上位者への敬意の表明（大石 1975）という対人機能以外にも、相手からの非難を受けないようにすること（金田一 1959, 辻村 1977）, 「相互尊重・自己表現」(文化審議会 2007), 円滑な人間関係を確立・維持すること（宇佐美 2002）, 「距離化の表現」(滝浦 2005), 「品格を保持する」などの対人機能が見られる。

## 2.3 敬語形式の種類

敬語の種類に関しては、3分類（辻村 1967）, 4分類（大石 1975）及び5分類（大石 1983, 宮地 1983）が存在する。これ以外にも、「詞の敬語」と「辞の敬語」といった2分類（時枝 1954）や、「素材敬語」と「対者敬語」といった2分類（辻村 1967）もある。このように、敬語の分類に関しては諸説があるが、『敬語の指針（答申）』（文化審議会 2007）では「尊敬語・謙譲語Ⅰ・謙譲語Ⅱ（丁重語）・丁寧語・美化語」の5分類が提唱されてきた。この5分類は従来の学校教育等で行われる「尊敬語・謙譲語・丁寧語」という3分類と対立するものではなく、話し手が相手に表そうとする気持ちの在り方をより詳しく分類しているため、本研究においてもこの5分類を用いる。ただし、敬語を広義の定義に基づいて規定しているため、「恐れ入り」「よろしい」「でしょう」など、5分類以外の改まり度の高い言語表現は全て「その他」に分類する。そこで、本研究では、敬語形式を「尊敬語・謙譲語・丁重語・丁寧語・美化語・その他」という6種類から捉えることとする。

## 2.4 敬語使用

『学校の中の敬語1』（国立国語研究所 2002:12）は敬語行動とは「対人的な言語行動のうち、自分自身が周囲の人的要素あるいは場面的要素や話題への配慮を、敬語や待遇表現形式を中心とするさまざまな言語表現に託して表現する言語行動である」と定義づけている。本研究では、『学校の中の敬語1』の概念及び2.1で定めた敬語の定義に基づき、敬語使用（敬語行動）を「話し手（書き手）が人間関係や場面を判断し、その時々のお気持ちの在り方を聞き手や話題にのぼる第三者に対して、6種類の敬語形式に託して表す言語行動である」として捉える。人間関係や場面による敬語使用に焦点をあてた調査には宇佐美（2001）, Elena（2003）, 岡野（2000）, 岡部（2001）などがある。しかし、これらの先行研究では学習者の場合、人間関係と場面のうちの一つの要素を操作した状況での敬語使用に注目しているものが多い。人間関係と場面の二要素を統制し組み合わせた状況で、どのように敬語を使い分けているのかについては十分に検討されていない。また、学習者が尊敬語などを含む丁寧度の高い発話をあまり用いないという報告があるが、補償ストラテジーの使用の有無については、まだ十分に研究さ

れていない。特に、中国人学習者のみを対象とする調査や母語話者との比較調査については、ほとんど行われていない点が課題であると言える。

## 2.5 敬語規範意識

敬語規範意識について、吉岡（1995：54）は「どういう場面ではどういう敬語表現を選択・付加すべきかというルールが意識の中に形成されたもの」と定義している。日本社会の中に存在する暗黙の規範性に馴染みの薄い学習者と母語話者とを比較した場合、人間関係と場面に応じた適切な敬語形式を一瞬の判断で選ぶことは難しいことが予想される。この点を踏まえ、本研究では、吉岡（1996）の定義に従い、学習者と母語話者の敬語規範意識について、「どのような人間関係と場面で敬語を使うべきか」と「どのような敬語形式を選択して使うべきか」という2つの側面から考察を進める。「どのような人間関係や場面で敬語を使うべきか」に焦点をあてた先行研究では母語話者を対象とした調査（文化庁 1995, 浅松 2003, 中野 2003, 野村 2006 他）が多くあるのに対して、学習者を対象とした調査（中野 2003, 藤原 2013）は十分に検討されていないのが実情である。一方、「どのような敬語形式を選択して使うべきか」に関しては、母語話者に尋ねた調査の蓄積（廣兼 1990, 平井 1999）がある。中国人学習者のみを対象とする調査には周（2009）がある。これらの研究は主として質問紙調査によって意識的な側面のみに焦点が当たっているものである。ただし、意識があっても実際にはその通り使用されないこともあるという（吉岡 1996）。実際の会話では、コミュニケーションをスムーズに進めるために、どの敬語形式が適切なのかを十分に考え、話すことができない場合もある。その際、彼らが使った敬語形式は、質問紙調査で答えてもらった敬語規範意識通りではない可能性がある。特に、敬語の使用経験や言語運用能力が限られる学習者は、宣言的知識によって構築された敬語規範意識を持っていたとしても、運用につなげられない可能性が考えられる。そのため、質問紙調査によって得られる敬語規範意識だけでなく、実際に用いられる敬語形式の使い分けに着目して検討を行う必要があるが、そのような研究は、ほとんどなされていない。

## 2.6 学習者の母語における敬語と日本語の違い

中国語は孤立語であり、日本語のような「お/ご～になる」「～です・～ます」「いらっしゃる」といった体系的な敬語文型を有していない（興水 1977）。中国語では、それぞれの単語が意味を持ち、助詞などの機能語を付加せず、目的語や補語で文を言い切ることが特徴である。このような言語構造のほかにも、「敬語の対人機能」「使用される敬語形式」「敬語が使われる人間関係と場面」といった3つの側面においても、それぞれ違いがあることが指摘できる。そのため、中国語の知識や規則が学習者の日本語の敬語使用に影響を与える可能性もある。この点で、学習者の敬語規範意識及び人間関係と場面に応じた敬語使用は、母語話者のものと違いがあるのかという疑問が浮かび上がってくるが、そういった視点のもとで検討した研究は、まだ数が限られている。

以上のことを踏まえ、本研究では学習者の母語からの敬語規範意識と敬語使用の転移という視点から以下の点を明らかにすることを目的とする。

【課題1】中国人日本語学習者は敬語が使われる人間関係と場面について、どのような敬語規範意識を持っているのか。この敬語規範意識は母語話者のそれと、どのような点で同じで、どのような点で異なるのか。

【課題2】中国人日本語学習者の敬語使用は人間関係と場面に応じて、どのように異なるのか。また、母語話者のそれと異なるのか、異なるとすれば、どのように異なるのか。

### 第3章 調査1:敬語が使われる人間関係と場面に関する敬語規範意識

調査1では、学習者は敬語が使われる人間関係と場面について、どのような敬語規範意識を持っているかを明らかにすること、また、母語話者のそれと異なるのかについて検討することを目的とした。さらに、学習者の敬語規範意識には属性による差があるかどうかを明らかにすることも目的とした。2021年5月に中国人日本語学習者109名にオンライン形式による質問紙調査を実施した。「どのような人間関係と場面で敬語を使うべきだと思うか」と尋ねたところ、半数以上が人間関係では「大学の先生・面接試験官・職場やアルバイト先の上司・初めて会った病院の医師・大学の事務職員」、場面では「公的な場・感謝場面・依頼場面・応答場面・謝罪場面・質問場面」と回答していた。一方で、人間関係では「親・兄姉・親友・同学年の友人・恋人・弟妹」、場面では「雑談場面」を選んだ学習者は10%未満であった。そして、先行研究に基づき、母語話者とはどのような点で同じで、どのような点で異なるのかについても検討を行った。結果は、以下の通りである。

① 上下関係の目上に対して敬語を使うべきだと考えている点、親しい人に対して敬語をほぼ使わないことを意識しているという点で、学習者と母語話者は似ている。ただし、母語話者が家族に対して敬語をほぼ使わないのに対し、学習者が親疎関係に加え、家族内の世代の上下関係に目を向けていることが母語話者との違いとして挙げられる。

② 改まった公的な場面や心理的に弱い立場に立つ場面では敬語を用いるべきだと意識しているという点で学習者と母語話者はほぼ一致している。気楽に話す場面ではほぼ敬語を使わなくなるのは、学習者も母語話者も類似している。

また、24の人間関係と14の場面に対する敬語規範意識について、属性による差があるかどうかをみるために、学習者の属性をいくつかのグループに分けた上で、カイ二乗検定を行った。その結果、6種の相手において5つの属性で有意差が見られ、5つの場面において4つの属性で有意差が認められた。これらの結果から、学習者が人間関係や場面に対する画一的な敬語規範意識を持っているとは言えず、属性による差があることが示唆された。また、日本語の習熟度の向上とともに、学習者の人間関係に関する敬語規範意識が母語話者のそれと近似する方向に向かうことが示唆された。



## 第4章 調査2:母語話者と学習者の場面（感謝・依頼・面接）ごとの敬語使用の比較

調査2では、調査1の結果をもとに、「感謝\*教員」「依頼\*副店長」「面接\*面接官」という3つのロールプレイ場面を用い、敬語の使用頻度、使用する敬語形式の種類、発話丁寧度の観点から、学習者と母語話者の敬語使用の特徴を明らかにするとともに、両者の類似点と相違点に明らかにすることを目的とした。2021年6月に20代、30代の大学生・大学院生4名（学習者と母語話者2名ずつ）にオンライン形式（Zoom）でロールプレイを実施した。感謝、依頼、面接という3つ場面での学習者と母語話者の敬語使用を、敬語の使用頻度、敬語形式の種類、発話丁寧度の3つの観点から分析した。その結果、以下の点が明らかになった。

① 学習者は、母語話者ほど敬語を使用していなかった。「感謝\*教員」の場面で最も敬語を使用し、「依頼\*副店長」「面接\*面接官」の順で使用していた。

② 学習者は母語話者のように、場面や対人関係、改まり度、発話行為の種類に応じて、適切な敬語形式を選択的に使うことができなかった。そのため、場面に関わらず、定型表現に依存し、丁寧語の「ありがとうございます」や謙譲語の「お願いします」などを多く用いて相手に配慮を示そうとする傾向が見られた。これは母語の影響を受けていた可能性もある。

③ 母語話者は場面に関わらず、全ての発話で「0レベル」以上の発話文を使用し、発話全体の丁寧度を維持していた。ただし、場面によって「+1レベル」と「+2レベル」の使用率は異なり、「感謝\*教員」場面で最も多く、「面接\*面接官」「依頼\*副店長」と続いていた。これに対し、学習者は場面に関わらず、「0レベル」を多用し、「+2レベル」は少なかった。更に、「面接\*面接官」「依頼\*副店長」では「-レベル」も使用していた。

④ 学習者の「-レベル」の発話は、中途終了型発話文であったが、この使用は丁寧度を下げるものではないと考えられる。学習者は、相手の発話と丁寧度を合わせるために「-レベル」の中途終了型発話文をポジティブな対人戦略として使用していたか、母語の影響を受けて使用していた可能性がある。

## 第5章 調査3:感謝・依頼場面における親疎関係の違いによる敬語の使い分け

調査3では、話者を学生、対話相手を教師（親・疎）とし、教師に感謝を述べる場面と、依頼する場面での敬語使用について検討し、母語話者と学習者を比較分析した。また、敬語形式の機能に対する理解、非敬体に対する考え方、敬語の誤用の3つの観点から、学習者と母語話者の違いが生じた原因について考察した。2022年2月にオンライン形式（Zoom）により、20代と30代の大学生・大学院生40名（中国人学習者20名、母語話者20名）の調査対象者はそれぞれ、感謝と依頼の2場面で、指導教員と初対面の教員のどちらかを相手に2つのロールプレイをしてもらった。場面（感謝・依頼）と相手（親・疎）を組み合わせたロールプレイ場

面での学習者と母語話者の敬語使用を、調査2同様、使用頻度、敬語の種類、発話丁寧度の3つの観点から分析した。また、その結果に基づき、敬語形式の機能に対する理解、非敬体に対する考え方、敬語の誤用の3つの観点から、学習者と母語話者の間で違いが生じた原因を考察した。結果、以下の5点が明らかになった。

① 全ての場面で母語話者の方が学習者よりも敬語を使う傾向がある。母語話者にとっては親疎関係の「疎」とともに、場面の「依頼」が敬語使用に強く作用する要因であるのに対し、学習者にとっては、親疎関係は敬語使用を決定づける要因ではなく、場面の「依頼」が敬語使用に大きく影響していた。

② 母語話者は全ての場面で、尊敬語、謙譲語を頻繁に用い、場面や親疎関係によって、相応しい機能を有する敬語形式を使い分けていた。具体的には、感謝場面では尊敬語、丁寧語を多く使い、依頼場面では謙譲語、その他に当たる丁寧表現を多用していた。そして、相手が疎の場合、丁寧語を多く使用していた。これに対して、学習者は全ての場面で謙譲語を多く使い、母語話者ほど尊敬語を使わなかったが、丁寧語、丁寧語、その他の使用率は母語話者より高かった。学習者は場面に関わらず、定型表現の「お願いする」「ありがとう」、授受関係を示す「～ていただく」や雅語・美化辞（上品な言葉）を多用し、それらを呼称語と組み合わせて使っていた。学習者は母語話者と比較し、人間関係と場面に応じた適切な敬語形式の使い分けができていないと考えられる。

③ 母語話者は全ての場面で「+レベル」の発話文が最も多く、次に「0レベル」が続き、「-レベル」が非常に少なかった。母語話者は依頼場面で最も丁寧な「+2レベル」を多く用い、感謝場面で「+1レベル」を多く使っていた。疎の関係で「+2レベル」を使うとともに、「-レベル」の発話文を意図的に使用することで、相手にポジティブな配慮を示そうとしていた可能性がある。それに対し、学習者は全ての場面で「0レベル」の発話文が最も多く、次に「+レベル」であり、「-レベル」が最も少なかった。学習者は全ての場面で「0レベル」「-レベル」を母語話者より多く使っていた。学習者には依頼場面で「+2レベル」と「-レベル」を多く用い、感謝場面で「0レベル」を多く使用するという場面による差があったが、母語話者のように親疎による違いは見られなかった。

④ 学習者は敬語形式の種別やそれぞれの機能、使い方を十分に理解していないことが窺われた。特に、学習者は、素材敬語の対者敬語化に関する尊敬語の機能と使い方と、「です・ます体」の対人機能や的確な使い方に関して、十分に理解していない可能性がある。この点に関して、学習者は敬語に関する知識が不足しており、特に、宣言的知識を有していたとしても、日本社会・文化の理解に基づく学習・練習・応用が不足し、手続的知識としては獲得されていないため、学習者の母語の知識が日本語に転移している可能性が指摘できる。

⑤ 学習者は敬語の誤用率は僅か2%であり、敬語の誤用が、学習者と母語話者の間の違いが生じた原因であると判断することはできなかった。

## 第6章 結論

本研究では、学習者の人間関係と場面に関する敬語規範意識と、人間関係と場面に応じた敬語使用の特徴とともに、それらの母語話者との相違点を明らかにした。

まず、学習者がどのような人間関係と場面で敬語を使うのかという敬語規範意識を、調査1ではアンケート調査によって明らかにし、母語話者との相違について検討を行った。その結果、目上の人に敬語を使うべきだと考えること、親しい人には敬語をほぼ使わないと考えること、改まった場面や心理的に弱い立場に立つ場面で敬語を用いるべきだと意識すること、気楽な場面ではほぼ敬語を使用しないことという4点では、学習者と母語話者は類似していた。両者の違いとしては、「親疎関係に加え、世代の上下関係にも目を向ける」「属性による差がある」の2点が挙げられる。

次に、調査2ではアンケート調査の結果を踏まえ、学習者と母語話者の両者が敬語を使う可能性がある人間関係と場面を組み合わせた「感謝\*教員」「依頼\*副店長」「面接\*面接官」という3つのロールプレイ場面を設定した。さらに調査3では親疎関係と組み合わせ、「感謝\*親（指導教員）」「感謝\*疎（初対面の教員）」「依頼\*親（指導教員）」「依頼\*疎（初対面の教員）」という4つの場面を設定した。母語話者と学習者の敬語使用の特徴を使用頻度、敬語形式の種類、発話丁寧度の3つの観点から比較分析を行った。加えて、敬語形式の機能に対する理解、非敬体に対する考え方、敬語の誤用の3つの観点から、学習者と母語話者の違いが生じた原因について考察を行った。その結果、敬語の使用頻度、敬語形式の種類、発話丁寧度の3点では、学習者と母語話者が大きく異なることが分かった。また、学習者が敬語形式の種別やそれぞれの機能と的確な使い方に関して十分に理解しているとは言い難いと考えられた。特に、尊敬語の対者敬語化や、上下関係・親疎関係を調節する「です・ます体」の対人機能と適切な使い方についてである。学習者は宣言的知識としてのみ敬語を学習しており、手続的知識が不足している場合は、母語の知識が日本語に転移してしまった可能性が指摘できる。

総合的な考察として、以下の点が指摘できる。母語話者は「+2レベル」と「+1レベル」のどちらを多く使うかで感謝場面と依頼場面を区別しているのに対し、学習者は「+2レベル」の使用量と「です・ます体」の有無で依頼場面と感謝場面を調節していた。このことから、敬語が単独の言葉として使われるのではなく、多様な敬語形式と「です・ます体」とが組み合わせられ、用いられるという点（辻村 1977）に関して、学習者は十分に理解していなかったのではないかと考えられる。この知識が不足している場合、母語の知識が日本語に転移する可能性がある。学習者向けの敬語の指導順序などは小学校指導要領に示された母語話者に対する国語教育のものと類似している（廣兼 1990）が、日本語の言語習慣や日本の文化に馴染みの薄い学習者に向けた日本語教育では、同様の指導順序の以外にも、人間関係や場面に応じた適切な判断力・運用力・理解力を育てるための十分な指導や学習活動も必要ではないかと考えられる。

本研究の結果から導かれる教育的示唆は以下の通りである。日本語の敬語は、語彙のほかに特定の敬語の文型があり、人間関係や場面などに影響されるため、学習者が適切に敬語を使用

できるようになることは非常に困難だと考えられる。また、敬語は社会生活から生まれた言語表現であるため、学習者が宣言的知識だけではなく、手続的知識として習得できるようにする必要がある。さらに、外国人学習者にとっては、語彙や文法などの言語要素に加えて、状況や文脈に応じた言語使用ができること（大澤 2006）、対象言語の文化を理解すること（Byram 1997）、対象言語文化における適切な対応と、母文化とのギャップに対する理解（畑佐 2013）が不可欠となるだろう。具体的に、社会における敬語使用についての理解を深めながら、実践を通じて適切な敬語の使い方を身につけられるような指導デザインが必要であると言える。また、対人コミュニケーションにおいて、母語話者が敬語をどのように使っているか、また、その使い方が時代とともに変化しているかどうかを十分に理解することは、学習者が敬語を使いこなすために不可欠なものであると考えられる。さらに、母語に日本語のような複雑な敬語体系がなく、日本語の敬語を真に理解することが難しい学習者が日本語の敬語をよりよく理解するためには、言語ごとの境界を越えた共通の基準を媒介とすること（ポライトネス理論など）が望まれる。ただし、ポライトネス理論などを学習者向けの敬語教育に導入する際には、日本語独自の特徴やそれに内包される日本の文化における適切な対応と、学習者の母語の特徴や自文化における対応との違いに留意しながら、教育活動を展開することも重要ではないかと考えられる。

今後の課題として以下の3点を挙げる。今後はこれらを踏まえ、日本語教育の現場から、さらに詳細な分析や検討を行う必要があると考える。

① 本研究では、学習者がどのような人間関係と場面で敬語を使うべきかに焦点を当て敬語規範意識を検討したが、学習者がどのような敬語形式を選択して使うべきであると考えているかは十分に分析できなかった。加えて、それが実際の会話での人間関係と場面に応じた敬語形式の使い分けとずれがあるかどうかを検討する必要がある。

② 本研究では、学習者が敬語形式の種別とそれぞれの機能、使い方に対して十分に理解していないことが分かった。しかし、敬語そのものの機能や使い方は学習者に十分に理解されているのか、また、母語話者の理解と異なるのか、本研究では十分に検討することができなかった。

③ 本研究では、学習者と母語話者の間で敬語使用に関して違いと、それが生じた原因についてそれぞれ3つの観点から検討したが、これら以外の視点からも分析・考察することが大きな課題として残されている。例えば、学習者と母語話者が異なる文脈や状況において、会話の目標を達成するために敬語をどのように使って会話を構築しているのかに関して違いはあるのか、あるとすれば、どのような違いがあるのか。また、それぞれの談話で採用するポライトネス・ストラテジーに違いはあるのか、あるとすれば、どのような違いがあるのか。さらに、それらに関わる原因は何だろうかといった点である。